

2025年9月28日 聖霊降臨節 第17主日礼拝

メッセージ「7の70倍まで赦しなさい」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 18章21-35節

今回のお話は「赦し」に関するお話です。ある時、ペトロがイエス様に尋ねました。「主よ、きょうだいが私に対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。7回までですか」。それに対してイエス様は「7回どころか、7の70倍まで赦しなさい」と答えられたというお話です(21-22)。これは「仏の顔も三度まで」という諺に対して、イエス様は3回どころか、490回まで赦してくれるという意味ではありません。むしろ「いつまでも際限なく赦しなさい」という意味だろうということは、容易に検討がつくのではないのでしょうか。

そしてその後続けて、王様に対して莫大な借金があった家来が、王様から借金を帳消しにしてもらうという寛大な措置を受けたにもかかわらず、自分に借りのある仲間に対しては、大変厳しく接したために、主君の怒りを買って拷問係に引き渡されたというたとえ話が、イエス様によって語られています。このようなたとえ話を素直に聞くと、「自分も他人も誰だって失敗することはあるのだから、お互いに赦し合うこと、それこそ7の70倍までとはいかなくても、相手の言い分も聞いて、赦すことが大切」なのだと、イエス様から言われているように読めるのではないかと思います。いかがでしょうか。

そもそも、このお話は21節と22節、それから23節以降とでは別々の伝承であったと考えられています。例えば、前半部分と似たお話として「ルカによる福音書」17章3節4節にも、次のような言葉があります。

「もしきょうだいが罪を犯したなら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたの方を向いて、『悔い改めます』と言うなら、赦してやりなさい」(3-4)

こちらでは「7の70倍」ではなく、「1日に7回でも」ですが、これらは元は同じイエス様の言葉だったろうと考えられています。つまり、「何回だったとしても、回数に関係なんかありませんよ」ということだったのでしょう。

23 節以降の後半については、そもそもそこに登場する家来たちが、果たして「きょうだい」や「仲間」と呼べるような関係だったのかという点が気になります。一人目の家来は、王様に対して「1 万タラントン」の借金をしていたとあります(24)。「タラントン」というのは「マタイによる福音書」25 章にある「タラントンのたとえ」にも出てくるお金の単位で、もともとは金や銀の重さを表わしたものだようですが、およそ6000 日分の日当だったそうです。またイエス様がこの地上を歩まれていた紀元 1 世紀当時、その地の領主が領地の人々から徴収していた年間の税収が、600 タラントンとも 400 タラントンとも言われています(ヨセフス『ユダヤ戦記』『古代誌』)。ですから、分かりやすく 1 タラントンを現代の 1 億円と考えても、「タラントンのたとえ」では、一人当たり 5 タラントンや 2 タラントンや 1 タラントンの預けられたわけですから、すごい金額です。それが更にこのお話では 1 万タラントンなわけですから、単純に 1 億円を1万倍すると 1 兆円です。もはや家来が一人で着服して浪費するような金額ではありません。

一方、その家来から 100 デナリオンを借りていたというのは、数か月分の収入に相当する金額というわけですから、現代でいうと 50 万円や 100 万円ぐらいになるでしょうか。当時の人々としても、それくらいの大金を扱うことは確かにあり得たのだらうと思います。農作物は年によっても、天候によっても、収穫量が多かったり少なかったりと左右されますし、期日までに決められた税金は納めなければならなかったでしょうから、やむを得ず仲間内でお金を貸し借りすることも、しばしばあったのだらうと想像できます。ですから、このたとえ話に出てくる二人の家来というのは、決して対応な関係の仲間ではなく、前者は帝国の中のごく一部の支配階級の権力者側にいた家来であり、後者はそれらの権力者たちによって踏みつけられていた庶民の一人であったということが分かります。

古代社会において、政治権力者たちはその権力を神から与えられている特別な人たちだと考えられていましたから、その分責任も重大であり、正しい政治ができなければ、その責任・負債は、それこそ自分自身も、妻子も家も、持ち物を全て差し出し売り払ったところで、決して返すことのできないくらいのものであったと言うことができます。つまり、一人目の家来の借金、負債というものは、人間に対する負債ではなく、神に対する負債であり、責任であったというわけです。それは人間の力

では決して返すことができないものです。神様、王様の方もそのことを分かっていました。だからこそ家来の懇願の言葉に耳を傾けたのでしょう。

26 節の言葉は、ここでは「どうか待ってください」と翻訳されていますが、もとのギリシア語では「どうか寛大にしてください。怒らないでください」というような意味です。言い換えれば「寛大なご慈悲をいただけませんか」と言ったところでしょうか。すると家来の主君は彼を「憐れに思って、彼を赦し、借金を帳消しにして」(27) やりました。こちらは元の言葉では「はらわたを突き動かされて、彼を放し、借金をゆるしてやった」です。主君のはらわたを突き動かすほどの懇願、謝罪ができたにもかかわらず、それらは偽物だったのか、演技だったのか……。その後、この家来は、自分に対して借金のある仲間を呼びつけ、彼自身が主君に対して弁明した言葉(26)と全く同じ弁明の言葉(29)がその相手から発せられたにもかかわらず、その弁明や懇願の声に耳を傾けることなく、牢に閉じ込めてしまいました(30)。つまり、自分よりもさらに弱い者を踏みつけたということです。そして神である主君はそんな彼を赦しませんでした。

このお話の直前にも、実は似たようなお話が書かれていました。「マタイによる福音書」18 章の 15 節からです。「きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところでとがめなさい。言うことを聞き入れたら、きょうだいを得たことになる」(15)。さらに「二人または三人が私の名によって集まる場所には、私もその中にいるのである」(20)です。これらのお話の流れから今回のたとえ話について改めて考えてみると、「罪を犯したきょうだいを何回まで赦すべきでしょうか」「7 の 70 倍まで」というのは、幾度となく失敗を繰り返し、道を踏み外してしまうことのある私たちに対して、「とにかくひたすら赦し続けなさい」ということを伝えているのではない。むしろ、互いの弱さを分かり合いながら、諫めるべきことは諫め、咎めるべきところは咎め、叱るべきところは叱る。その上で、きょうだいとして、仲間として、対等な関係を持つ者同士として共に生きる。決して、どちらかが上に立ち、他方を踏みつけるような関係であってはならない、ということなのではないかと思います。なぜなら私たちは皆、神様から決して返しきることの出来ないほどの大きな大きな恵みを頂いてこそ、今日も生かされているのだから……。

福音書を読んでいると、イエス様はいつでもどこでも誰に対しても、優しくニコニ

コしていたかということ、そんなことはなく、激しく怒ることもありましたし、エルサレムの神殿では暴れたりもしています。そしてそれらはいずれも権力者が、人々を見下したり、ぞんざいに扱ったり、踏みつけたりした時であり、そのような言動が神の御心にそぐわない、道を踏み外したものであるということを身をもって示すためのイエス様の言動、ふるまいでした。

「赦す」と翻訳されているギリシャ語「アフィエーミ」の、もともとの意味は「そのまま行かせる」です。ケガレを清めるのでもなく、破れや壊れを直すのでも、上塗りするのでもありません。その言葉が 21 節 22 節では「赦す」と訳されており、27 節では借金を「帳消しにしてやった」と訳されています。つまり、「負債を免除して、そのまま放免してやった」ということです。日本語でも調べてみると、「赦(ゆる)す」という言葉と、こわばった体が「緩(ゆる)む」、固く握りしめている手を「緩(ゆる)める」というのは、どうも同じ語源のようです。自分に負い目のある相手を逃がすまいと固く引き留めている手を緩めて放すことで、そのまま行かせる。様々な負い目やしがらみに、がんじがらめになってしまっている自分自身を、それらから解放し、握りしめている手を緩めてそのまま解放していく。そうして初めて、誰かを踏みつけたり、誰かに踏みつけられたりする関係性から、私たちは解放されていくのではないかと思います。

「7 の 70 倍まで赦しなさい」。それは周りにいる人たちと、共に生きるということ。「共に生きることができる」ということを諦めないことなのではないでしょうか。今日も私たちは神様からの大きな恵みを頂いて、生かされていることを思いながら、イエス様に従う道へと押し出されて参ります。